

小川未明文学館 館報



第1回「小川未明文学館こども祭」

当館や未明作品に小さな頃から親んでもらうため、第1回「小川未明文学館こども祭」を2017年（平成29）5月13日に開催しました。当日は幼児から小学生を中心に大勢の方が来館され、「赤い蠟燭と人魚」をテーマとするペーパークラフト等に参加いただきました。

vol.12



小川未明文学館

新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）

TEL 025-1523-11083

FAX 025-1523-11086

小川未明文学館館報 第12号

2018年（平成30）5月31日発行（年刊）

目次

【寄稿】

宮川健郎氏「小川未明と『赤い鳥』」

2

【報告】

文学館1年の記録（平成29年度）

・ 展覧会

・ 各種講座など

・ その他関連事業

文学館講座（講座要旨）

・ 第1回講座

・ 第2回講座

・ 第3回講座

【小川未明文学賞】

【ボランティアネットワークだより】

「のばら」 vol.14

【文学館からのお知らせ】

16

14

13

11

9

8

7

6

4

小川未明と『赤い鳥』

宮川 健郎

武蔵野大学文学部教授



◆『赤い鳥』創刊百年

「赤い鳥」は（中略）子供の純正を保全開発するために、現代第一流の芸術家の眞摯なる努力を集め、兼て、若き子供のための創作家の出現を迎える、一大区画的運動の先駆である。」

これは、「赤い鳥」の標榜語（モットー）と題された、創刊のことばの一節だ。「子供の純正」ということばに、子どもの心を「童心」と呼び、子どもを純粹無垢なものとして理想化する大正期の子ども観がよくあらわれている。児童雑誌『赤い鳥』の創刊は、1918（大正7）年7月、ことし（2018年）は、創刊から百年の記念の年にあたる。

『赤い鳥』を主宰した鈴木三重吉は、もとは小説家だった。三重吉も、創刊号から数々の童話を発表した詩人、歌人の北原白秋も、文壇ロマン派の出身で、その立場から「童心」を発見したともいえる。

『赤い鳥』は、1929年3月号まで出て休刊する。1931年1月に復刊、鈴木三重吉の病死により、1936年10月の三重吉追悼号をもって終刊をむかえる。休刊の期間をはさんで、前期『赤い鳥』、後期『赤い鳥』ということがあるが、前期を代表する作家が芥川龍之介である。三重吉にとっては夏目漱石門下の後輩にあたり、最初の短編集『羅生門』を出したばかりの新進作家だった。三重吉に協力して、創刊号に「蜘蛛の糸」を書いたほか、「魔術」「杜子春」など5編の童話を『赤い鳥』に寄稿している。

後期『赤い鳥』を代表する作家として新美南吉をあげよう。南吉の「ごん狐」は、小学校4年生の国語の教科書にかならずのっているが、『赤い鳥』に投稿して掲載されたものだ。『赤い鳥』の愛読者だった南吉は、投稿を重ね、このほかに童話が3編、童謡も23編採用されている。

◆未明と鈴木三重吉

小川未明は、早稲田大学卒業後の1906年、早稲田文学社に入る。島村抱月のもとで雑誌『早稲田文学』の定期増刊『少年文庫』の編集にたずさわり、子どもの文学とのかかわりがはじまる。「月と山兎」と改題して、第一童話集にあたる『おとぎばなし集 赤い船』（京文堂書店1910年）に収録した「お山の兎」など4編の童話を同誌に執筆している。のちに書かれた、未明の「童話を作って五十年 雪降る国の

詩人の独語」（『文藝春秋』1951年2月）には、こうある。

「私は『少年文庫』の編集をしていたころから、子供のためのものを書きたいと思っていたのです。それまでの子供のものは、主として子供を導くための訓読本的なもので、古い躰けのためだとか、世界観の固定したものばかりでした。しかし、ほんとうに子供自身をよくしてゆくには、子供の靈魂に感動を与える文学でなければならぬ。子供に与えるものは、第一義のものでなければならぬ。作り物などの第二義的なものではダメだ。ほんとうの芸術でなければならぬ。自分は純真な子供、正直な人間に向って訴えよう。今までのお伽噺の形式を改めて、新しい夢の世界を展開する芸術を作ろう。それは童話文学であると考えたのです。」

つづけて、未明は、鈴木三重吉と『赤い鳥』について書く。

「その後、鈴木三重吉君を知ってから、或る日、代々木の原を散歩しながら、その話をしました。ロマンチズムの精神は、目に見えぬものを信ずるところにある。それは憧憬でも希望でもよろしい。単に嘗てなき憧憬や希望ならば、それは単なるロマンチズムであろうが、一つの目標を定めて、それに向って突進してゆくのであれば、それは新ロマンチズムである。それには児童の世界に入ってゆくのがほんとうであろうと思う。子供ばかりでなく、成人でも童心のある人に興味を持たれるもの、それが一つの文学革命になるものではないか、と言いました。鈴木君はただ考えているだけで、その時は返事をしませんでした。その後私に私所へ来て「小川君、僕も児童ものをやってゆこうと思う」と言ったのです。これが鈴木君の『赤い鳥』が出来る初めです。『赤い鳥』は上品な読み物として、世に希望を与えました。大きな仕事です。児童の世界の仕事をするには、生命の伸長を信ずることで「す。」

後年、浜田広介は、小川未明が亡くなった際の追悼文「小川未明先生をいたむ」（『読売新聞』1961年5月12日夕刊）で、未明の文壇デビューのころをふりかえって、つぎのように述べている。

「かくて、先生は、かたや稲門出の未明とあって、かたや赤門出身の三重吉に相対し、相まって自然主義側作家群の作品とは異質な作品、新ロマン派の創作をかかげることになるのであるが、その三重吉と相たずさえるかたちになって、いわゆる童話文学に創作を移行させていったのである。この両作家のありかたは作家の本性、氣質に従う当然の成り行きではあったにしても童話の志向を身をもって示したもので、すなわち、それは人生における童話の理想主義を固めたという功績になるのであるが、これらによって日本の近代童話は世界的な童話のながれにひびきをたてて合流ができたといえよう。」

◆『赤い鳥』の未明／『おとぎの世界』童話の未明

小川未明は、『赤い鳥』にのべ44編を発表している。「仕合わせの人形」とそうでない人形の運命をたどる「気まぐれの人形師」、鉛チョコ（キャラメル）の箱に描かれ

た天使の旅の物語「鉛チョコの天使」、厳寒の北国で行方知れずになった人びとを描く「黒い人と赤い鳥」、新緑の季節の月のよい晩に少女の姿でおばあさんのところへやってきた胡蝶の話「月夜と眼鏡」、たくさんの人びとや荷物をのせた汽車に傷つけられた身の上をなげく線路と月の対話「負傷した線路と月」など、その後、未明童話のアンソロジーなどに繰り返し再録される代表作もいくつも掲載された。「黒い人と赤い鳥」や「月夜と眼鏡」は、掲載号に、清水良雄がカラーの口絵を描いている。

2巻2号の雑誌名と同じ「赤い鳥」は詩だ。「鳥屋の前に立つたらば／赤い鳥が啼いていた。／私は姉さんを思い出す。／電車や汽車の通つて／町に住んでる姉さんが／ほんとに恋しい、なつかしい。／もう夕方か、日がかける。／村の方からガタ馬車が／ラッパを吹いて駆けて来る。／鳥屋の前に立つたらば／赤い鳥が啼いていた。／都の方を眺めると、／黒い煙が上つてゐる。」(全行)タイトルルビは「あかいとり」だが、作中のルビは「あアかいとり」である。未明の「赤い鳥」は、姉さんの暮らしている都会を連想させるものとして描かれている。

さて、つぎは、菅忠道『日本の児童文学』増補改訂版(大月書店1966年)の「童心文学の開花」の一節。

「赤い鳥」によって童話・童謡流行の風潮が生れると、類似的童話雑誌がつぎつぎに創刊されだしてきた。めばしいものには、「おとぎの世界」(大正八年)、「金の船」(大正八年、後に「金の星」と改題)、「童話」(大正九年)などがあり、……(カックコ内原文)

菅は、「三重吉と白秋が「赤い鳥」に拠っていたように、「童話」では、小川未明の童話、西条八十の童謡が人気の中心であり……」とも記している。鈴木三重吉は、『赤い鳥』の後発雑誌を「マネ雑誌」と呼んだ。「赤い鳥のマネ雑誌、オトギの世界、金の船、お話、コドモ雑誌、童話とうとう五つ出来ました。」(小池恭あて書簡1920年4月18日)『おとぎの世界』は、『赤い鳥』に1年近くおくれ、1919年4月創刊。1920年5月号に、鈴木三重吉が同誌に送った私信が「類似雑誌に対する非難」として掲載された。三重吉は、『おとぎの世界』を「お猿」という。猿真似の雑誌ということだ。掲載作品の質が低く、「童話とか童謡とかいうものの名前を汚している点に於て、私の標語の価値をひどく傷けていくれます。」とも述べている。特に童謡に対して批判的だが、これについて、西田良子は、こう考察する。

「赤い鳥童謡とは根本的に違う童謡、白秋などとは全く違う詩論を持っている詩人のグループつまり、『おとぎの世界』に童話童謡を執筆している民衆詩派グループの詩人たちに向って、童話童謡の世界から手を引くように抗議しているのである。」(『おとぎの世界』の創作童話)『雑誌「おとぎの世界」復刻版別冊』岩崎書店1984年所収)

民衆詩派とは、『おとぎの世界』の創刊のころから作品を寄せている福田正夫、白鳥省吾らのことだ。『おとぎの世界』は、まだ二十代前半だった初山滋が表紙を描いて評判になり、6号までは小川未明が顧問として名前を出している。未明は、同誌に

童話、童謡など計15編を寄稿し、そのなかには、これも代表作の童話「牛女」もふくまれる。「牛女」とは障害のある大柄な女性だが、自分の子どもは行く末を思つて、ずいぶんかわいがる。

雑誌「童話」は、『赤い鳥』におくられること約2年、1920年4月創刊。先の菅忠道の記述にもあるように、小川未明は、『童話』の看板作家のひとりであり、童話や随筆計32編を書いている。このなかには、よく知られた童話、目の見えない弟と美しい姉娘が登場する「港に着いた黒んぼの話」などもふくまれる。

小川未明は、『赤い鳥』創刊以前から書いていた既成作家だから、『赤い鳥』だけではなく、その「マネ雑誌」にも、そのほかの誌紙にも数多くの作品を発表している。発表する媒体によつて、作風が変わるといふことはなく、未明は未明である。

◆浜田広介の意見

「大正童話界を回顧するとき、目にいちじるしい現象は、なんといつても、「赤い鳥」の創刊以来、童話を主とする諸雑誌が相つづいて月刊され、それらに拠つて無数の童話が掲載されたこと」と「はしがき」に記して書きはじめられたのは、浜田広介の「大正昭和の童話界」だ。1928年に刊行された童話作家協会『日本童話選集』第三輯(丸善)の巻末に掲載された。

つづく「童話雑誌に依る展望」では、雑誌ごとに書いている。「赤い鳥」については、「作品を点検すれば、この誌上にも真の創作童話は乏しい。小川(未明)宮川註、以下も同じ)氏の作品は特別として、島崎(藤村)、芥川(龍之介)、宇野浩二、その他数氏の作をのぞけば、創意において、果してどれだけの独自性をかぞえることが出来るであろうか。」とある。前期『赤い鳥』の終わりに書かれた文章だが、たしかに、鈴木三重吉にしても、外国文学などからの再話がほとんどなのだ。浜田広介自身は、1917年に『大阪朝日新聞』が募集した「新作お伽噺」の一等に当選した「黄金の稲束」でデビュー、その後、児童雑誌『良友』(1916年1月創刊)の編集者、作家になったこともあつて、『赤い鳥』に寄稿することはなかった。

浜田広介は、「小川氏の作品は特別として」といい、同じ文章の「創作童話の項」を「童話の真の作家として最高峰にそびえる小川未明氏は、……」と書き出す。広介の意見をとおして浮かびあがってくるのは、『赤い鳥』創刊の前もあとも、創作童話の作家としての小川未明の存在が大きいという、そのことである。

付記 柏書房から近日刊行予定の『赤

い鳥』事典に執筆した「小川未明」の項目と内容が重複するところがあることをおこわります。



『赤い鳥』創刊号
1918年(大正7)
赤い鳥社発行
表紙絵は清水良雄「お馬の飾」

文学館1年の記録

【展覧会】

平成29年度は、特別展を2本、企画展を1本、特集展示（テーマ展示）を5本開催しました。

特別展

〈第25回小川未明文学賞受賞記念展〉

〈会 期〉 3月30日～5月7日
 〈会 場〉 文学館市民ギャラリー
 〈来場者数〉 4001人

小川未明文学賞の節目の回となる第25回の大賞・優秀賞作品の決定を記念して、これまでの受賞者とその作品や、今回の最終選考に残った作品の講評をパネルで紹介するとともに、25回記念における一年間の催しを紹介しました。

来場者からは、「大賞作品を読んで感動した」「書籍化されている作品を全て読んでみたいと思った」という感想が寄せられました。

特別展

〈中川貴雄が描く〉

「野ばら」「月夜とめがね」原画展

〈会 期〉 10月7日～11月26日
 〈会 場〉 文学館市民ギャラリー
 〈来場者数〉 7137人

中川貴雄氏（イラストレーター）の協力により、『はじめてよむ日本の名作絵どうわ1 野ばら・月夜とめがね』（2016年 岩崎書店）の原画30点と、中川氏のスケッチブックやラフデザインなどの関連資料を展示しました。

「野薔薇」は、1920年（大正9）4月12日の『大正日日新聞』に発表された童話です。本作は1914年（大正3）の第一次世界大戦の勃発、1920年のシベリア出兵など、不安定な当時の世界情勢を背景に描かれた作品で、人と人の友愛が戦争で簡単に壊されてしまうという戦争の悲惨さと平和の大切さを訴えた反戦童話です。

「月夜と眼鏡」は、「野薔薇」の発表から2年後の1922年（大正11）7月に『赤い鳥』に掲載された童話です。「おだやかな、月のいい晩」におばあさんの身に起こる不思議な出来事を通じて、未明が大切にしていた相互扶助について考えさせる童話です。

「野薔薇」・「月夜と眼鏡」は、いずれも童話集の収録数が多く、未明童話の中でも代表作として知られている作品で、これまでも多くの作家によって童話の情景が描かれ、人々に親しまれているお話です。

今回、中川貴雄氏の手で新たに描かれた童話の情景は、鮮やかな色彩の童心あ

ふれる世界であり、特に子どもたちの関心が高いものでした。会期中は、親子で会場を訪れて作品を楽しむ姿が多くみられるとともに、この機会に初めて未明童話を読んだという子どもたちの声もあり、挿絵の魅力を感じながら、未明の作品に触れるきっかけを作ることができました。来場者からは、「かわいく優しい中川さんの絵の世界に引き込まれた」「物語の情景がよく描かれていてすばらしい」という感想が寄せられました。

また、同じ会場内では、参考展示（昭和40年までの出版物にみる「野ばら」「月夜とめがね」の挿絵）を開催し、茂田井武や武井武雄、初山滋、小川哲郎（未明次男）らが描いた挿絵28点を紹介しました。

さらに、特別展関連イベントとして、会期中の11月19日には、未明ボランティアネットワークの協力により特別展合同おはなし会を開催し、25人の方から参加いただきました。



特別展 〈「野ばら」「月夜とめがね」原画展〉



特別展 〈「野ばら」「月夜とめがね」原画展〉チラシ
 中川貴雄氏・画



特別展 〈第25回小川未明文学賞受賞記念展〉

■関連イベント

ギャラリートーク「絵とどうわがでるまで」

中川 貴雄氏（イラストレーター）

佐々木幹子氏（岩崎書店編集者）

〈日にち〉10月21日

〈参加者〉20人

絵童話の刊行に携わった中川貴雄氏・佐々木幹子氏を講師に、挿絵制作や書籍編集時のエピソード、未明童話から感じられることなどをお話しいただくギャラリートークを実施しました。

参加者からは、「普段なかなか知ることのできないイラストレーターの世界や出版業界の裏話が聞けて良かった」「実際に刊行に携わった人の話を聞くと、作品がより深く理解できる」という感想が寄せられました。

企画展

〈未明童話「牛女」絵本原画展〉

〈会期〉12月14日～1月28日

〈会場〉文学館市民ギャラリー

〈来場者〉3122人

小川未明連絡会議（2016年創設）の構成団体である上越文化会館による、未明童話「牛女」をテーマとするイベントの実施に伴い、当館の応援企画として、所蔵資料の中から高野玲子氏が描いた「牛女」（1999年 偕成社）の絵本原画21点と関連資料を展示しました。

「牛女」は『おとぎの世界』1919年（大正8）5月号に掲載された童話です。牛女と呼ばれた母親がわが子の行く末を案じ、亡くなった後も姿を変えて子どもを見守るといふ、母親の深い愛情を描いた作品です。未明の故郷・高田から見える妙高山の山肌に表れる雪形をモチーフにしていることでも知られています。

来場者からは、「母の愛の強さや自然描写が印象深い」「じっくりと作品に触れることができた」という感想が寄せられました。

特集展示1

〈小川未明と小田嶽夫〉

〈会期〉4月1日～6月25日

〈会場〉文学館常設展示場

上越市出身で芥川賞受賞作家として知られる小田嶽夫は、小川未明と交流のあった人物の一人です。

小田は、同郷で母校高田中学校（現高田高等学校）の先輩でもある未明に会うため、文学友達を介して坪田譲治と会い、坪田から未明を紹介してもらったそうです。郷里の大先輩に会いたいという願いが叶い、未明と面会するのは1928年（昭和3）、未明46歳、小田28歳のときでした。それから、小田はときどき未明の元を訪ねるようになり、二人は交流を深めていきました。

本展では、未明と町で偶然会ったときのエピソードを記した小田嶽夫自筆原稿や未明宛ての書簡・年賀状、小田が書斎に置いていた未明自筆色紙などを展示し、郷土が生んだ二人の文学者のつながりを紹介しました。

特集展示2

〈丸善版『未明童話集』の魅力〉

〈会期〉7月1日～8月31日

〈会場〉文学館常設展示場

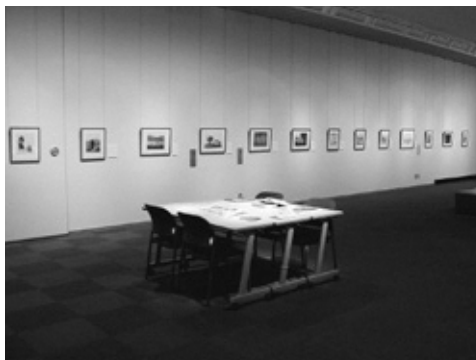
丸善版『未明童話集』は、1927年（昭和2）から1931年（昭和6）にかけて、全5巻で刊行されました。これは、1926年（大正15）に「童話作家宣言」を発表してから初の童話全集であり、小説の筆を折り、童話ひとすじに進もうと決意した未明の転換期に刊行された童話全集です。

『未明童話集』は、各巻いずれも凝った造りの豪華本で、未明の意気込みが感じられます。装丁・挿画は、武井武雄、初山滋、村山知義、川上四郎といった当時一線で活躍していた童画家たちが担当しており、未明の童話集・童話全集の中でもひととき美しい本として知られています。

本展では、丸善版『未明童話集』全5巻を紹介することにより、「童話作家宣言」前後の未明自身の大きな転換期に注目しました。



『未明童話集1』
武井武雄・装丁
丸善(株)
(1927年)



企画展〈未明童話「牛女」絵本原画展〉



特別展関連イベント ギャラリートーク

特集展示3

〈未明の子どもたちと童話「金の輪」〉

〈会 期〉9月2日～10月29日
 〈会 場〉文学館常設展示場

1919年(大正8) 1月21～23日に『読売新聞』に発表された童話「金の輪」には、主人公の子どもの病氣と死が描かれています。実は、未明は1914年(大正3)に長男哲文を、1918年(大正7)に長女晴代を病氣で亡くしており、この愛児二人の死が「金の輪」の成立に大きく影響しています。

本展では、未明とその子どもたちについて紹介する特集の第一弾として、所蔵資料と小川家の寄託資料の中から、夭折した子どもたちの写真や二人が亡くなった年に描いた絵画、二人に捧げられた小説集や童話集などを展示し、「金の輪」の成立背景と童話に込められた未明の思いを紹介しました。

特集展示4

〈未明と子どもたち
 —次女鈴江と次男哲郎—〉

〈会 期〉11月1日～12月27日
 〈会 場〉文学館常設展示場

未明の次女鈴江は、翻訳家として活躍する一方で、父未明についての回想記を執筆しており、未明の生い立ちや人柄を私達に伝えてくれます。また、次男哲郎

は画才に恵まれ、未明の童話集の挿絵や装丁にも携わり、情景豊かな未明童話の世界を繊細で美しい挿絵で私達に伝えてくれます。

本展では、未明とその子どもたちについて紹介する特集の第二弾として、鈴江と哲郎の関係資料を展示し、未明の人物像や未明童話の世界を紹介しました。

特集展示5

〈未明ワンダフル童話〉

〈会 期〉1月4日～3月21日
 〈会 場〉文学館常設展示場

人にとって身近な動物である犬は、未明童話の中にも数多く登場します。2018年(平成30)が戊戌年であることから、未明童話の中で犬が登場する童話を紹介しました。



『犬と人の話』
 田村孝之助・画
 (1936年 湯川弘文社)



『こどもと犬とさかな』
 安泰・画
 (1943年 新生閣)

〔各種講座など〕

子どもプログラム 小川未明文学館子ども祭

〈日にち〉5月13日
 〈会 場〉文学館市民ギャラリー
 〈参加者〉263人

未明童話や文学館にさらに親しんでもらうため、新たな催しとして「小川未明文学館子ども祭」を開催しました。

第一回目は「赤い蠟燭と人魚」をテーマとするペーパークラフトをはじめ、ぬり絵やかげ絵、未明童話のアニメ上映会などを行い、大勢の方に参加いただきました。

朗読研修会

〈日にち〉6月9日・6月23日・
 7月14日の全3回
 〈会 場〉高田図書館会議室
 〈参加者〉30人

橘由貴氏(朗読療法士・ヴォイスアーティスト)を講師に、朗読研修会を開催しました。はじめに基本的な声の作り方や表現力の磨き方、発声練習方法の大切さを学びました。その後、未明童話「野薔薇」「月夜と眼鏡」を題材に実践的な朗読を行い、講師から個々に指導を受けました。また、講師の朗読を聴き、今後の朗読練習の参考にしました。



朗読研修会



小川未明文学館子ども祭



特集展示3 〈未明の子どもたちと童話「金の輪」〉

童話創作講座

〈日〉 6月24日・7月29日・8月5日の全3回

〈会場〉 高田図書館会議室

〈参加者〉 19人

小川未明文学賞の最終選考委員である佐々木赫子氏（児童文学作家）を講師に、短編童話の書き方を学びました。

まず、テーマや構成についてアドバイスを受けた後、受講者各自が創作した童話の講評をいただきました。さらに、受講者同士でお互いの作品について意見交換を行い、今後の創作の参考にしました。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや市立図書館で読むことができます。

文学館講座

〈日〉 10月28日・11月11日・11月18日

〈会場〉 高田図書館会議室

〈参加者〉 延べ84人

小川未明やその文学、特別展にちなんだ講座を3回開催しました。講師は、第1回 菊永謙氏（武蔵野大学講師・小川未明文学賞委員会委員長）、第2回 小椋裕二氏（上越教育大学副学長・小川未明文学館専門指導員）、第3回 宮川健郎氏（武蔵野大学教授）でした。

（詳細は【報告】文学館講座8頁に掲載）

文学館おはなし会

〈日〉 毎月第2・4日曜日午後2時

〈会場〉 文学館ビックブックシアター

〈参加者〉 延べ282人

未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力により定期的に未明童話を中心としたおはなし会（朗読会）を開催しています。

出張おはなし会

未明童話に出会う機会をより多くの方に提供するため、未明ボランティアネットワークの協力により、市内の小学校や放課後児童クラブ等に朗読ボランティアが出向き、おはなし会を開催しました。

平成29年度は、市内小学校24校と放課後児童クラブなど10か所、合計34か所（1778人）を訪問しました。

子どもプログラム 未明童話と親しもう

— ともたちに届けたい未明のメッセージ —

未明童話といえば「赤い蠟燭と人魚」や「月夜と眼鏡」などが有名ですが、このほかにも素晴らしい童話が数多くあります。これらを子どもたちに届けるために、月替わりで未明童話の冊子や無償配布しました。参加者にはスタンプカードを配布し、スタンプ数に応じて、文学館オリジナルグッズをプレゼントしました。

【その他関連事業】

小川未明連絡会議合同イベント

〈小川未明クリスマスフェスティバル〉

〈日〉 12月23日

〈会場〉 上越文化会館

未明連絡会議構成団体による合同イベントを行いました。未明の母校 市立大手町小学校6年生による未明などの総合学習成果発表や、小川未明研究会（小椋裕二氏主宰）の講演会「親子で楽しむ未明童話のお話」、上越音楽文化振興会の「牛女原画展、高田文化協会の『文芸たかだ』と小川未明ミニパネル展、未明ボランティアのペーパークラフト講座などを行いました。

第26回 小川未明文学賞贈呈式

〈日〉 3月28日

〈会場〉 学研プラス（東京）

小川未明の文学精神を次代に継承し、子どもたちの心に夢と希望を育むことを目的に1991年（平成3）に創設された、小川未明文学賞の贈呈式を東京都内で開催しました。大賞は、ちばるりこ氏の「供養絵―心寄り添い人―」、優秀賞は、土屋千鶴氏の「瀬戸内少年記―海人とルソン―」に決定しました。

（大賞受賞者のコメントは【小川未明文学賞】13頁に掲載）

▼小川未明クリスマスフェスティバル
（未明ボランティア ペーパークラフト講座）



▲小川未明クリスマスフェスティバル
（大手町小学校の学習成果発表）



童話創作講座

文学館講座

小川未明やその文学、特別展にちなんだ講座を3回開催しました。講師は、第1回・菊永謙氏、第2回・小笠裕二氏、第3回・宮川健郎氏でした。

〈会場〉 高田図書館会議室

〈参加者〉 延べ84人

第1回「未明童話に見る詩的感性」

〈講師〉 菊永 謙氏

〈日〉 10月28日



私は詩を書いてきたので、未明童話の詩的感性を中心にその魅力についてお話します。

小川未明は、27歳で雑誌記者を辞めて作家として立つ決意をし、翌年には最初の童話集『おとぎはなし集 赤い船』（1910年〈明治43〉）12月 京文堂書店）を刊行します。ところが、生活は困窮していき、とうとう未明の二人の子どもが栄養失調になります。そして、1914年（大正3）には長男哲文が疫病で亡くなり、1918年（大正7）には長女晴

代が結核で亡くなってしまいます。最愛の子どもたちとの死別が、この時期の未明童話に色濃く出ています。

「牛女」（『おとぎの世界』1919年〈大正8〉5月）は、障害を持つ母親と子どもとの深い愛情が描かれた作品です。二人は死別して離れ離れになってしまいますが、霊魂において深く結ばれています。母親が雪形となって山の中腹に表れて我が子を見守ったり、コウモリに姿を変えて子どもを助けたりするのが魅力的で、母親の子どもに対する情愛が描かれた未明の傑作です。

また、「港に着いた黒んぼ」（『童話』1921年〈大正10〉6月）も、深い愛情で結ばれていたはずの者たちの別れの悲しみが主題となっています。深く結ばれているはずの姉弟の、あるいは、死別しても子の行く末を見守る母親と子どもの間に、立ち入ってくる何かを、作家・未明は見つめようとしています。

これらの作品を読むとき、未明の代表作「赤い蠟燭と人魚」（『東京朝日新聞』1921年〈大正10〉2月16〜20日）にも同じような主題が展開していることに気づきます。金に目がくらんだ蠟燭屋の老夫婦、雪山に姿を現し見守る牛女（母親）に別れも告げず町へ立ち去る子ども、金持ちの話に心を乱す姉。善良な人間の内面にふと表れる欲得や心の迷いが深い愛情のつながりにくさびを打ち込みます。「牛女」「港に着いた黒んぼ」「赤い蠟燭

と人魚」は、素材はそれぞれ違うものの、情愛を持って育てたもの・結びついていったものが、金や損得というちよつとした揺らめきで心失ってしまうところが共通しています。

同じく『金の輪』（『読売新聞』1919年〈大正8〉1月21〜23日）も少年が病気で亡くなってしまいう話で、最愛の子どもとの死別が未明に深い影を落としていたことをうかがわせる作品です。

私は、この時期の未明の中には葛藤し、分裂し苦悩する自分があったのではないかと思います。自分の中にある善と悪に心揺れる悩みを、未明は童話の世界で描こうとしています。このような未明童話は戦後の一時期に否定されますが、詩的な世界で善悪や心の葛藤を考えさせる魅力により復活し、今も子どもたちに親しまれています。

【講師プロフィール】

菊永 謙（きくなが ゆずる）氏

少年詩・童話の創作をするともに、詩・童話・児童文学の評論活動を展開。『小川未明童話全集（16巻・別巻1）』（2001年〜2002年 大空社）の復刻出版を企画担当。日本児童文学者協会・日本児童文学学会等に所属。現在、小川未明文学賞委員会委員長。武蔵野大学講師。



第1回文学館講座 講師の菊永氏



第1回文学館講座

第2回「小川未明と月

―「月夜と眼鏡」その他―

〈講師〉小椋裕二氏

〈日にち〉11月11日



■はじめに

小川未明文学における「月」と「太陽」の役割や意義について考えます。

小川未明は15歳のときに春日山へ移り住みますが、そこは未明の家族しか住んでいないような、淋しい、自然に囲まれた地で、北の方を見ると日本海が見える場所です。私は郷土で育ったことが未明文学に大きな意味を与えたと考えています。春日山神社の境内には、「雲の如く高く／＼ものごとく、かがやき／＼ものごとく」といわれず」という未明の詩碑があります。未明にとって「海」は命のほかなさや運命に抗えない無常観を感じさせる沈黙のシンボルであり、それから自由になるものとして「雲」のシンボルが用いられています。

未明は象徴化の達人です。童話は擬人化、象徴化の手法を用いて話を進めるものですが、これは童話作家にとってなくてはならない資質・能力です。例えば、

未明は弱い者の存在を、ときに草花を通して描いています。草花は樹木のように根をしっかりと張るわけではないので簡単に抜かれてしまいます。はかなく、受け身で、けなげな存在。それが子どもの属性に似ているため、不安や孤独を抱えた子どもの象徴として草花が用いられ、童話を通して、子どもに寄り添い、子どもの孤独を癒す存在となります。未明童話はしばしば暗いと言われます。草花が登場する童話を見ても枯れてしまうだけの話もあれば、草花が誰かによって救われる話もあります。未明が小説家であったころは、踏みじられて枯れてしまった暗い現実的な話を書くことがよくありましたが、大正時代の末、未明が45歳の頃、童話作家宣言をしたころから弱い存在に対して寄り添う、希望を与えるような話が増えてきます。

■「太陽」

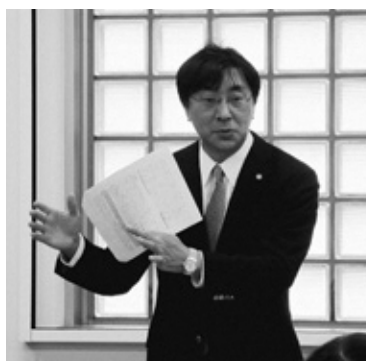
未明は、昼より夜を、太陽より月の世界を、未来を切り開いていく考え方より幻想や過去の思いを深めていくことを好みます。対比の手法を用いて、強いものよりも弱いものに共感する思いを童話の中に描き、弱いものに寄り添うことの重要性を伝えようと思いました。

未明文学における「月」の表現の役割や意義について考える前に、「太陽」はどのように用いられているかを考えてみます。「水仙と太陽」(『未明童話集5』

1931年(昭和6)7月)では太陽は夜の世界に起こっていることは何も知らない存在として登場します。「明るき世界へ(小さな芽)」(『小説倶楽部』1921年(大正10)9月)では、太陽は自身の能力を誇示するだけの存在として登場します。強いもの・明るいものが太陽だとすれば、弱いもの・暗い世界の中で泣いているものに寄り添うのが月です。太陽の表現がすべて否定的なものとは言えませんが、総体的に、未明は太陽の光よりも月の光を大事にしていたのだと思います。

■「月」

次は「月」です。「月夜と眼鏡」(『赤い鳥』1922年(大正11)7月)は、きれいな情景描写で読者の五感が刺激されるように書かれています。未明の中には文明と自然の対比があり、近代化・文明化により自然や環境が破壊され、人間も種々の問題を抱えるようになったと考えました。人も虫も花も本来、自然の一部であり、自然の中に存在するものは助け合って生きています。お婆さんが困っているときに眼鏡を売りにきた男、娘さんが困っているときに傷を治してやろうとしたお婆さん。人が自然の中で素直に生活するとき、互いが互いをいたわり助け合うようになる。この童話は、未明が大切にしました「相互扶助」の考えをテーマにしています。小説家としての未明は現実の



第2回文学館講座 講師の小椋氏



第2回文学館講座

厳しさを描きました。だから暗い。童話の中では、その現実をやさしく救い上げるような話が多くなります。月夜の中で幻想世界が開かれ、人間が本来持っていた自然の世界に戻ります。人が自然の中で、互いが互いをいたわり助け合うようになる、これが「月夜と眼鏡」のテーマです。

「負傷した線路と月」(『赤い鳥』19

25年(大正14)10月)では、レールの傷を洗ってやった雨が「月は、太陽とはまったく気性がちがっています。そして、万物の運命をつかさどる力は、いまこそ太陽のようになくても、昔は、えらいかったのだそうです。」と言います。太陽が出ている日は労働に従事する時、月が出ている夜は休息の時です。文明のなかった昔は、昼でも自然に接することができ、いわば月の時代でした。世界は月の時代から太陽の時代へと移りかわりました。未明は、太陽から月の時代へ、文明から自然への回帰の必要性を訴えかけた作家です。月を眺めるとき、自然に向かうとき、人間は本来持っていた性情を取り戻します。善性を取り戻すためには、自然との回路を復活させることが必要だと述べた作家です。

「野薔薇」(『大正日日新聞』1920年(大正9)4月12日)に月は出てきませんが、国境を守る二国の老人と青年が自然の中で心を通わせる童話です。ところが人間相互の心の通い合いを戦争が奪い、戦争によって若者が死に、野薔薇も枯れてしまいます。枯れた野薔薇は戦争の悲惨さの前に美は生まれえない、ということを示しています。「野薔薇」の老人の夢の中に現れる青年が野薔薇の香りをおかぐのは、自然をみつめ、自然に根を下しているものは間違わないというメッセージを伝えたものではないでしょうか。未明は自分の考え方の根がどこにあるの

かをしっかりとわきまえた人です。彼は東京で作家活動をしましたが、生涯、自分の根が生まれ育った自然ゆたかな上越高田にあるのだと思っていました。

「何うして子供の時分に感じたことは正しきか」(『童話』1926年(大正15)6月)は、未明の文学を考える上で大事な随筆です。弱いもの、苦しんでいるものに寄り添うことを忘れて経済活動に勤しむ人は「太陽」の人で、大人になるとそうなっていくます。しかし、大切なことを忘れず子どもを思いをずっと持たながら人やものに優しい目を注いでいくのが「月」の人です。そのことを未明のこの随筆の中で明瞭に語っています。

北と南の色彩は異なり、北には北の、南には南の文化があります。北に生まれた作家は北の色彩を使って童話を書けば良いと未明は言います。昼の世界と夜の世界、強者と弱者、太平洋と日本海、文明と自然、搾取社会と相互扶助の社会、それを「太陽」と「月」というシンボリックな表現の中で表しています。

約1200編の未明童話の中で、「月」が出てくるものを分類してみます。「月と山兔」(『少年文庫』1906年(明治39)11月)や「アカイチヤウチンノ話」(『コドモノクニ』1934年(昭和9)2月)の月は、ノンシヤランな月。「ハーモニカラフクト」(『コドモノクニ』1933年(昭和8)10月)や「秋ノ野」(『コドモアサヒ』1933年(昭和8)9月)

の月は、あかるい月。「跛のお馬」(『童話』1922年(大正11)5月)や「花と少女」(『赤い鳥』1924年(大正13)5月)の月は、幻想的な月。「月夜と少年」(『読売新聞』1918年(大正7)10月2(3日)や「遠方の母」(『赤い鳥』1927年(昭和2)12月)の月は、願いを映す月。「頭をはなれた帽子」(『未明童話集4』1930年(昭和5)7月 丸善株式会社)や「二人の少年」(『家の光』1931年(昭和6)11月)の月は、みまもる月。「オ月サマト虫タチ」(『コドモノクニ』1932年(昭和7)10月)や「負傷した線路と月」(『赤い鳥』1925年(大正14)10月)の月は、たずねる月。「宝石商」(『現代』1921年(大正10)5月)や「塩を載せた船」(『童話』1923年(大正12)5月)の月は、さすとす月。「竹馬の太郎」(『童話』1924年(大正13)1月)や「月と海豹」(『愛の泉』1925年(大正14)4月)の月は、みちびく月です。

未明文学における「月」を考えるとときには、「月夜と眼鏡」や「月と海豹」がその特徴を考える端緒となります。「月と海豹」は子どもを失って泣いている海豹を月がやさしくなぐさめ、海豹のためになさな太鼓をもってきてやる話です。自然本来の中で、未明が考える「相互扶助」の世界が現れています。未明は互いに弱いものを助け合う世界を「月」を通じて描きました。

■弱いものへの共感、いたわり、慈しみの心

「沙漠の町とサフラン酒」(『童話』1925年(大正14)6月)や「牛女」(『おとぎの世界』1919年(大正8)5月)、「金魚売り」(『赤い鳥』1927年(昭和2)6月)も弱いものへの共感、いたわり、慈しみの心を描いています。

「金魚売り」は、童話作家宣言後の未明の代表作の一つです。弱った金魚をすすんで買って大事に育てあげようとする少年の話です。未明文学には、小さいものや弱いものに対する愛があります。未明は晩年、古稀記念として「弱きもののために立ち代弁なきものの為に起つ 我これを芸術家の信条となす」と書いています。未明は「月夜」に目を注いで童話を描きました。金魚や犬や猫などの小動物と接する中で、弱いものへの共感や慈しみの心を抱きました。これが未明の童話の出発点ではないかと思えます。

【講師プロフィール】

小埜 裕二(おのゆうじ)氏

上越教育大学副学長兼 人文・社会教育学系教授。専門分野は日本近代文学(大正・昭和期の小説・童話研究)。三島由紀夫、宮沢賢治、小川未明等を研究。未明文学に関する研究・解説書籍を多数執筆。現在、小川未明文学館専門指導員。小川未明研究会主宰。

第3回「未明童話」絵童話化」の試み

〈講師〉宮川健郎氏

〈日にち〉11月18日



■「童話」の「絵本化」をめぐる

私が編集・解説した小川未明の2冊の絵童話(『赤いろうそくと人魚』安西水丸・絵 2012年、『野ばら・月夜とめがね』中川貴雄・絵 2016年、いずれも岩崎書店)を、絵本ではなく「絵童話」としたことにどのような意味があるのかをお話します。

「絵童話」ということばは児童文学研究の用語としては定義されておらず、児童文学に関する事典にも項目がありません。ですが、児童出版界ではよく使われており、子どもの本のタイトルになることもある不思議なことばです。

まず、絵本とは何かを説明するために3冊の絵本を紹介します。

1冊目は『あおくときいろちゃん』(レオ・レオーニ Little Blue and Little Yellow 1959年)。ちぎり絵のような手法で青い丸と黄色い丸が重なる緑の丸になるといふ、色の原理がドラマを動かしていくものです。絵を見ていけば

話が分かるものが優れた絵本だと思いません。絵が語り、ことばは手助けという絵本の特色がよく分かる本です。

2冊目は『いないいないばあ』(松谷みよ子・文 瀬川康男・絵 1967年 童心社)。これは本の形にとじられていることが大切で、ページをめくることがストーリーを進めていくエンジンになっています。絵本は、絵が語るという点では視覚的な文化ですが、同時に本という体裁をもっている形のある芸術、工芸といえます。童話や児童文学の本は、挿絵も多いので絵本と見分けがつかせませんが、言語芸術なので絵を全部抜いて本の形をしていなくても読める一群のもの

です。

3冊目は写真絵本『はるにれ』(姉崎一馬 1979年 福音館書店)。絵のかわりに写真で構成されていて、文字が全くありません。ことばがないので物語がないかという点、そんなことはなくて、一本のはるにれ(春楡、ニレ科の落葉高木)が季節を越えて生きていく姿が描かれています。この本はページをめくることで展開し、ことばがなくても絵本として成立しています。文字なし絵本は、ことばなしで自立できるので優れた絵本が多いです。

日本児童文学は童話から児童文学への変遷の歴史で、大正から戦後までが童話の時代、戦後から児童文学の時代です。童話は、詩的・象徴的なことばで心象風

景を描くもので、小川未明もこの時代の人です。一方、戦後は散文的なことばによって子どもの外側に広がっている状況や社会を描く児童文学になります。童話は象徴的な言葉で一語にイメージや意味をつめこむので基本的に短編ばかりですが、児童文学は子どもをめぐる事件を順々に書いていくために長編になります。この転換は1960年前後のことで、戦後を迎えて戦争や社会が新しい主題となり、それを書くためには詩的なことばでは書きづらく、社会的な問題を説明できる散文的なことばへと変わっていききました。

今の出版界では童話を絵本にする動きが盛んで、特に宮沢賢治が目立ちますが、これには違和感を持っています。賢治童話をはじめ絵本の世界に引き込んだのは『セロひきのゴーシュ』(こどものともし 福音館書店 1956年 宮沢賢治・原作 佐藤義美・案 茂田井武・絵)でテキストが賢治の原作とは違いますが、この本の編集者の松居直さんが、賢治には申し訳ないがテキストは絵本の分量に収めるためにダイジェスト、再話したといっています。賢治童話にはオノマトペ(擬声語・擬態語)があふれています。「セロひきのゴーシュ」はそれほど多くなくて、再話でオノマトペを加えています。ところが、読んでいて音楽が聞こえてくるのは再話ではなく原作の方だ

と思います。オノマトペは現実の模写ではなくて、一種の見立てで新しい現実を創り出すものです。再話の採用は絵が語り、ことばは手助けという賢治童話の「絵本化」の試みでした。

それから10年後の1966年に刊行された単行本『セロひきのゴーシュ』は、茂田井武の絵はそのままですが、本文は全く違って宮沢賢治のテキストに戻りました。「こどものとも」版が「絵本」だったのに対し、単行本は「絵童話」といえます。

童話や児童文学の絵本化には難しいところがあります。「絵童話」は、言語芸術である童話や児童文学と、絵が語りページをめくることによって展開する絵本の間にあるものだと考えています。絵童話では、テキストが豊かに語り、挿絵は手助けという逆転がおきています。

■未明童話の「絵童話化」

小川未明の「赤いろうそくと人魚」「野ばら」「月夜とめがね」を絵童話にしたのは、子どもたちに未明のことばを届けるためでした。この本を実際どのように子どもに届けたいかというと、自分で読むのでもいいのですが、幼い子どもの場合は誰かに読んでもらう本として使ってほしいと思います。

先ほど、童話から児童文学への変遷・転換について話しましたが、この転換期にもう一つの問題が起きました。童話

の時代の主な読者は幼年だと考えられていて、自分で読めないから読んであげられるもの、読んであげて楽しいものが理想でした。それが、児童文学では戦争や社会というテーマを緻密な書き言葉で語る必要がありますから、長編になり、その読者は自分で黙読できる10代前半が中心になりました。児童文学は、読んであげる「声」とわかれたのです。私は、これを「声のわかれ」と呼んでいます。戦後、童話から児童文学に転換し、幼年向けの文学が弱くなり、そこを絵本が肩代わりしている状況もあります。

小川未明は童話の時代の人なので、幼年の読者には誰かが読んであげるものだと思います。未明のことは少し難しく、今ではあまり使われないことばもありますから、絵童話に脚注をつけ、読み聞かせるときに子どもに聞かれたら答えられるようにしました。例えば、「野ばら」の冒頭には「とうざ」ということばがあります。「とうざ」は「しばらくの間」、「はたして」は「思ったとおり」、「いかにも」は「ずいぶん」という意味ですが、このように、口になじむけれども少し昔風のことばが「野ばら」にはたくさん出てきます。このようなことばに注をつければ、子どもでも分かるようになり、語彙も増えます。読み聞かせをする若いお父さん、お母さんの語彙も増えます。未明童話は口になじむ口語的な表現が多く、読んであげると

楽しい気がします。ただ、注の意味や解釈を子ども向けに言いかえるのは、なかなか難しく、頭をひねりました。

絵童話『野ばら・月夜とめがね』と『赤いろそくと人魚』の解説では、同じ「象徴」ということを書きました。「象徴」は頭の中の考えのように、形のないものを一つの形として表したのですが、童話は言語芸術ですから、本文のことばがもつ象徴性についての解説を加えています。

質問者：再話の『セロ弾きのゴーシュ』を読んだ子は、原作を知らないことになりますか。

講師：再話しか読んでいなければ、原作を知らないことになります。

子どもの本の世界では再話は沢山あるので、良し悪しというよりも仕方がないことです。かつて外国文学は翻訳ではなく再話が多く、日本の古典文学を現代の子ども向けに書きかえることも再話、子ども向けの書きかえは全て再話です。再話にはいろいろな問題がありますが、外国文学を簡単にわかりやすく換骨奪胎して子どもに読ませるということが1960年代くらいまで非常に盛んでした。それが、次第に完訳でなければならぬということになり、再話は廃れていきます。完訳が良いのかというと子どもには難しいことがあり、ちゃんと読める読者はいないので、外国文学に出会うハードル

を上げてしまう可能性があります。本との出会いは運命であり、その人にとって何が大切な読書体験になるか、わからないところもありますね。

講師プロフィール

宮川 健郎（みやかわ たけお）氏
宮城教育大学助教授等をへて、現在、武蔵野大学文学部教授。日本児童文学専攻。一般財団法人・大阪国際児童文学振興財団理事長、日本児童文学者協会評議員、宮沢賢治学会イーハトーブセンター理事ほか。小川未明文学賞選考委員。前・小川未明文学館専門指導員。



宮川氏編集・解説の絵童話（岩崎書店発行）
右：『赤いろそくと人魚』（2012年 安西水丸・絵）
左：『野ばら・月夜とめがね』（2016年 中川貴雄・絵）

第3回文学館講座 講師の宮川氏

第3回文学館講座

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、1991年（平成3）に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

平成29年度で第26回目を迎え、これまでに延べ12500編を越える作品が国内外から寄せられました。大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。



第26回小川未明文学賞大賞受賞

ちば るりこ氏

（大賞作品「くようえ供養絵——心寄り添い人——」）



受賞のひとこと

この度は、小川未明文学賞という憧れの賞を頂き、とても感激しております。本当にありがとうございます。

同じ岩手県在住で尊敬する作家の及川和男先生からお祝いのメッセージを頂きました。その中に「小川未明は読み物を文学に高めた方」と偉業を讃える言葉が書いてありました。このような素晴らしい方のお名前のついた文学賞を受賞できたことは、この上ない喜びです。仕事をしながら、児童文学を志し、20年以上、書き続けてきて本当に良かったと心から思います。

小川未明の作品は、子どもの頃から不思議な魅力を感じてきました。歌に例えれば、イ短調の調べのように懐かしさ、寂しさ、悲しさ、優しさがあり、それが人の心を惹きつけて離さない所以ではないかと思えます。私は「月とあざらし」が好きです。自分の子を失うという大きな悲しみを経験した未明は、自分自身のため、また、同じような悲しみを持つ人たちに向けて書いたものだったのではないかと思います。この思いは、私の書いた「くようえ供養絵——心寄り添い人——」にも通じるところがあるような気がいたします。

この物語は、10年ほど前、岩手県遠野のお寺で供養絵額を見たことから創作のヒントを得ました。供養絵額は、江戸時代から大正時代にかけて、故人の冥福を祈るため、家族が絵師に描かせたもので、故人が生きていたらこのようにあってほしいという幸せな姿が描かれています。初めて見たときから、いつか供養絵をテーマにしたものを書きたいと心に温めてきました。

この賞を励みとして、未来に生きる子どもたちのために、さらに書き続けて参りたいと思います。

第27回作品募集

◆募集作品

①短編部門（小学校低学年向け）

…400字詰め原稿用紙20枚～30枚

②長編部門（小学校中学年以上向け）

…400字詰め原稿用紙60枚～120枚

…いずれも小学生を読者対象とした創作児童文学で未発表の作品。各部門同時応募も可。

・A4サイズで縦書き。ワープロ等の場合は400字詰め換算枚数を明記。

・表紙に題名、筆名、本名、年齢、職業、性別、〒住所、電話番号を明記。

・原稿用紙2枚程度のアラすじを表紙の下に綴じる。

◆応募資格

不問（ただし、過去の大賞受賞者は除く）

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参

◆締切

平成30年10月31日（水）（消印有効）

◆入選作

・大賞（賞金100万円・記念品）

・優秀賞（賞金20万円）

◆発表

平成31年3月上旬（予定）

*詳細は小川未明文学館ホームページをご覧ください。ただくか、左記にお問い合わせください。

◆応募・お問い合わせ先

〒943-0832 新潟県上越市本町3-3-2

上越市文化振興課

「小川未明文学賞係」

TEL 025-526-6903

FAX 025-526-6004

E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp



(シャーフの会)

パネルシアターで行った「くらげのおばさん」の読み聞かせの場面です。短いお話ですが、カラフルなパネルで楽しく表現しました。



(グループさくら)

「こまどりと酒」…こまどりは優しいお爺さんの手によって自由になり大空に飛んで行きました。自然の中で自由に生きる幸せをかみしめながら…。

(毎月第2、4
日曜に実施)

文学館での おはなし会

特別展 おはなし会

未明の部屋
11月19日(日)



(お話の会うさぎ)

「月とあざらし」のお話です。子どもを亡くし途方に暮れるあざらしに月がやさしく話しかけ、手を差し伸べます。幻想的な絵と一緒に楽しんでもらいました。

特別展〈中川貴雄が描く「野ばら」「月夜とめがね」原画展〉に合わせて、特別展おはなし会を行いました。

作品名

殿さまの茶わん
野ばら
深山しんさんの秋
月夜とめがね
まほうのむち

担当グループ

シャーフの会
グループさくら
グループ空
お話の会うさぎ
未明童話の会



(シャーフの会)

「殿さまの茶わん」…薄手の茶わんで苦しんでいた殿さまと厚手の茶わんでホッとした殿さまの顔を見比べてください。



(グループ空)

「深山の秋」…秋深き山々に住む動物たちの思いや、人間のするがしこい様子を新人メンバー4名が心を込めて表現しました。

出張おはなし会、会員加入の連絡先

〒943-0832
上越市本町3-3-2
TEL 025-5526-6900
FAX 025-526-6904
E-mail: mimei@city.ioetsu.lg.jp

のばら

未明ボランティアネットワークだより

vol.14

発行：未明ボランティアネットワーク

発行日：2018年5月31日



(未明童話の会) 直江津小学校

「夏の日ざかり」…夏休み前のお話し会に低学年 70 名がふしぎそうな顔をして聞いてくれました。真ちゃんは桑畑にくるオニヤンマをつかまえました。



(グループ空) 保倉小学校
「ねずみとバケツの話」と「ある男と牛の話」をパネルシアターで楽しみました。



おもに小学校と
放課後児童クラ
ブへ行きました

出張おはなし会



中郷小学校の詩碑見学と黒姫童話館のイベント「心をはぐくむお話の世界」を見学しました。中郷小学校では松崎先生の解説をお聞きしました。童話館では長野の朗読グループによるお話の数々を聞くことができました。



バス研修

中郷小学校と
黒姫童話館



平成29年度
の活動

- ◆小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会…延べ参加者282人
- ◆出張おはなし会（小学校、放課後児童クラブ等）…34か所、1,778人
- ◆特別展おはなし会（小川未明文学館 未明の部屋 参加者25人）
- ◆会員の研修会（小川未明ゆかりの詩碑巡り 中郷小・黒姫童話館）

